

## 〈シンポジューム〉

# 中浦幌駅遁所と中川北松 (IV)

### 博物館報告編集局・編

山崎徹 神社のお祭りなんかもやはりお盆と同じようにありました。

中川シズ はい。

山崎徹 留真神社ですね。

中川シズ 留真神社かねたり、觀音さん。そこに馬頭さんというのがね。それもありました。

山崎徹 春と秋?

中川シズ 秋あったわね。お祭り、秋もあった。

中川政雄 春は何もないけれど、夏は8月10日。秋は9月10日。秋は相撲もやったし、はなやかな時もあった。

山崎徹 明治の話ですか?

中川政雄 大正になってからです。

山崎徹 この駅遁のそういうことをやっていた北松さんですから、日清戦争が明治27~8年ですね、それから第一次大戦が大正ですね。それが昭和3年にやめたから満州事変も支那事変も関係ないけれども、戦争に何か部落から送り出したという記憶はありますか? 今時大戦ではなくて明治、大正の頃に。

中川政雄 明治、大正。明治の戦争には誰も来ていません(留真に)ですからね。また熊谷農場にも来ていません。

山崎徹 日清戦争は27年、日露戦争は37年ですね

中川シズ いや、来ているよ。

中川政雄 その頃は、送り出したのだろうけど、私子供だったのでわからないけれども、一緒に来た人の中で1人戦死したのがあってね。日露で戦死してその人の遺骨が戻って来た。あれで昔なら三曹だったのだろうか。橋本甚五郎さんの長男さ

ん。そのお葬式に、私健蔵おじさんにおぶさつて行ったんだ。

山崎徹 それどこでやったんでしょう。

中川政雄 それは、熊谷農場でやったんです。

山崎徹 北松さんはここ駅遁の総代人であったわけですから、当然その何か寄り合いなんかがあったんではないかと思いますが?

中川シズ ありました。

山崎徹 そういうのを開いた記憶ありますか。

中川シズ はい、あります。

山崎徹 例えはどういう話で、話題は?

中川シズ やはりここに橋をもらって来なきやならんとか、学校もこううとか、色々にそういう寄り合いがありました。

山崎徹 それから福井県時代のしきたりとか、明治の頃ずっと——今でも残っているかもしれないが——故郷の時代を忘れないように、さきほど「越前踊り」もそうでしょうけれど、日常生活の中で故郷の事を偲んだ、あるいは忘れないでそれを生活の中で続けたなんていうことはあるんですか? お正月とかお盆とか着物の着方とか衣替えのしかたとか、わらじの作り方とか。

中川シズ はい、やりました。そこの家でわらじを作ることもみんなやりました。

山崎徹 その材料は?

中川シズ 俵です。

山崎徹 町から買って来て?

中川シズ はい、お米の間はね。それを川畑梅吉さんなんかがやったんです。

山崎徹 わらじをですか?

### 目 次

〈シンポジューム〉 中浦幌駅遁所と中川北松 (IV) .....	博物館報告編集局・編.....	2
生剛遺跡出土の遺物について.....	山川陽子・中山加代子・沢崎正則・泉幸平・森真悟・福本悦子.....	8
十勝地方におけるオホツク.....	吉野勢津子.....	13
底面に貝殻背圧痕文のある土器.....	後藤秀彦.....	15



P L. 1 中川北松 1937年6月4日撮影 (69才)



P L. 2 中川あき (59才)

中川シズ わらじつまごです。

山崎徹 つまごというのは昔の地下足袋ですね。

中川政雄 そうそう。

中川シズ 深靴、深靴です。今の長靴です。

中川政雄 そういうのはつまごとは言わない。

中川シズ いや、だけれどもそういう形のもの。

山崎徹 大体、形や使い方は今の地下足袋ですね

中川シズ そうだね、足にはいていたことない。

山崎徹 つまごを作ったことがありますか。

中川シズ 私はないですけれど、母親もそんなには。もう子供がいっぱいいたものですから。私がその接待をするんです。砂糖湯を飲ませたり、その他色々な。皆が集まってやるんですから。

山崎徹 集まってやる?

中川シズ 若い人がね。内地からのならわしか何かかね。

山崎徹 ここで?

中川シズ 5人でも、6人でも。

山崎徹 駅通は部落の中心的な場所でもあったわけですね。わらじを作り、つまごをつくる。あれはつまござしというんでしようね。わらじ編みですね。部落の人達皆が集まってやったんですか?

中川シズ 若い人達だけが。

山崎徹 男女?

中川シズ いえ、男の人だけです。女はしない。

中川政雄 つまごではないの何といったかな。尖ったつまごみたいになっていて、あまりくどいのではなく、ちょうど足の形みたいに尖ったものをはいた。

中川シズ またをつけてでしょう。

中川政雄 いや、またはつけない。この後をこう折ってね。

山崎徹 わらじというのは、こうだし、つまごというのは完全に地下足袋だし…。今言ったのは?

中川政雄 それも地下足袋です。

山崎徹 てんいの一種ですか。今言った何か長靴のようなもの。

中川シズ それは内地のことばですけれども、「深靴」と言っていました。ぞうりも作るし、縄もなった。上手に作ってね。

山崎徹 「深靴」といったんですね。

中川シズ そして大雪の時はそれにブドウの木や藤の木で作ったかんじきをはいて…。

山崎徹 かんじきは何で作ったんですか?やはり

ブドウのつる？

中川政雄 ニレの若木が多いですね。それからブドウのつるとか、こくわ。

山崎徹 そうすると「深靴」の中はどんな靴下なんですか？

中川シズ 靴下なんかないです。足袋です。

山崎徹 足袋ですね。作ったんですか？

中川シズ いっそ作るんです。買うたってないんですから。後にはあったけど、先にはね。

中川政雄 錢がないのさ。そんな物は昔からあつたさ。

中川シズ いや、それはもうお話にならないのです。

中川政雄 農家の嫁さんでもお母さんでも冬はもう1年はく足袋を炉端でさして。冬中それが仕事ですよ。

田中利 つまごわらじは僕らの時代でもありました。

山崎徹 大正13年ですか。昭和の初期でも。

中川シズ ええ、だんだん親のならわし教えでねそれがなきやならんかったの。

田中利 ゴム靴が流行してきたのがやはり昭和の2年か3年でしょう。僕が学校へ行くのに短靴ねあれを初めて買って貰った。昭和2年か3年に。

山崎徹 手は手甲ですか？

中川シズ 「手返し」というのです。

山崎徹 「手返し」

中川シズ 縫の入ったのね。「手返し」と言うのね、やはり。

山崎徹 越前弁ですね、これは。

中川シズ ああ、そうでしょうかね。

中川政雄 いや違うね。「手返し」というのは北海道ことばかもしれない。あの皮で、犬の皮かなにかで、中も毛にしてやはり売っていたのがあるんです。

中川シズ 全部こう入るんです。

山崎徹 今でいうんなら手袋ですね。

中川政雄 ぱっこ手袋。親指とあと4本。2つに割れた手返しというのがあったんです。

山崎徹 指の入いるところが2つですね。

中川政雄 それは縫入れて作ったのもあるし、皮の手返しを買って来た人もあるし。

中川シズ 皮をはく人なんか部落に1人か2人ぐらゐしかいない。

山崎徹 アイヌのキジのようなものを初めまして作ったということはありますか？

中川政雄 ない。アイヌが作ってくれたものを私らが利用したんです。

山崎徹 それから明治時代なんか男の頭なんていうのは決ってますけどね、帯広なんかでけっこう売れているのが水油なんです。ビンツケとか椿油とかね。

中川シズ ええ、「椿油」とか「糸露」とかね。

山崎徹 そんな物を使ったんですか？

中川シズ ええ、使いました。私らクリームをひとつ買ったら大事で2年使いました。

山崎徹 ウテナ・クリームですか？

中川シズ 何クリームといったかね。もう乾燥してしまって。

山崎徹 その油は誰が持つて来るのですか。やはり行商人ですか？

中川シズ やはりお店にもありましたよね。

山崎徹 その頃店というと駅逓に酒やタバコを売っていた程度でいわゆる雑貨呉服のたぐいは？

中川シズ 呉服は置いてない。

山崎徹 雑貨はありました。

中川シズ はい、日用品ね。

山崎徹 それは何というお店ですか？

中川シズ そんな中にあったんですから小さなものですけどね。そんな商店なんていう看板かけていない。

中川政雄 それで駅逓でもうやめたのは、ここへ鵜川さんが学校の先生をやめて始めたんだから46年だな。私のところはもう店をやめたし。

山崎徹 明治46年というのではないから、大正ですね。

中川政雄 まあ、大正2年頃。鵜川という学校の先生をしていた方が店を始めたんです。

山崎徹 それが留真の店の始まりですか？

中川政雄 そうです。今の郵便局のあるところですね。鵜川さんが店を売るというんで私の父親が世話になった熊谷牧場の二代目の人に買ってそしてあげたんですわ。熊谷泰造に。

山崎徹 熊谷泰造がこの鵜川の店を継いだんですね。

中川政雄 そうです。

山崎徹 買いとったんですか？

中川政雄 私のところの父親が、熊谷というの

もうすっかり没落して何もなくなつてね、そして私のところでここへ連れて来たんです。大津から

中川シズ 今の局長さんが2つの年だわ。

中川政雄 いや、2つや3つではない。

山崎徹 今の局長さんは何というのですか。

中川政雄 熊谷正輝。

山崎徹 泰造さんとはどういう関係ですか。

中川政雄 長男だね。

山崎徹 そうですか。そうしたら店は。

中川政雄 ない。

山崎徹 やつてない。建物もない？

中川政雄 建物もない。

山崎徹 その跡に郵便局が建った。そういう訳なんですね。

中川政雄 その店をやっているうちに、局が許可になったんです。「郵便取扱所」か何かそういうものです。それもうちの親父に「やれ」という支庁からの要請があって、「それなら私の大切な人にやらせてもらいたい」と言うことで熊谷さんを推せんしたんです。常室の郵便局もそうです。うちの親父にやらせたいというのを高井さんに、「やらないか」とやらせたんです。

山崎徹 高井さんですか？

中川政雄 そうです。高井徳次郎です。

山崎徹 常室ですね。けっこう人のためばかりに働いた方ですね。

中川シズ 本当に子どもながらも一生懸命やらされました。

中川政雄 支庁に田渕茂蔵という地方官がいて、私のこの駅通に泊って不用地を2ヶ月も測量とか何かをして、そしてその人も非常に自分が連れて來た人に土地をもらってやるというそういうことでお世話になったものですから、田渕さんが支庁をやめる時、何も財産ないし中川さんなんとかなるかということで、「ああ、私の財産でよかつたらどうぞお使い下さい」というわけで、牧場で何十町だか田渕さんの名儀に切りかえて、あの今の時和の…。それから高井さんにもそうして「高井さん、やらんかと言つたら…。」

山崎徹 田渕茂蔵さんに何をやらせたんです。

中川政雄 郵便局です。利別の郵便局ね。今度、代がかわつちやつたね。

山崎徹 いつ頃ですか。

中川政雄 田渕という局長いたはずです。

山崎徹 永井というのが一番古いんですがね。

中川政雄 高井さんに牧場一部借して…。

中川シズ 田渕さんという人は長くいたね。おとなしい人でした。その頃はズボンというものは、はじめなかったもの。ももひきですね。今のメリヤスもなくて、ネルのももひき、ネルのかぶりをかぶってね。

山崎徹 ネルのかぶりというのはどういうのですか。

中川シズ 長い3尺か4尺の大巾ものをこうかぶって、後で縛るの。

山崎徹 それは何の時にかぶるのですか。

中川政雄 男が働く時に。

山崎徹 今よく農家の女の人がやっていますわねあれは日焼け止めでしようけど。

中川政雄 あんなのではありません。ああいうふうに三角ではないんです。こう長い物です。大巾の物を二つに折って耳でも冷たくないよう二つに折ってこう上からかぶって、ここで手拭い…。

山崎徹 ここはどうします。

中川政雄 そうしてここでこうねじって、ここで縛ったものです。

中川シズ 漁師さんらもよくそういうことをしますね。

中川政雄 今でもちょっと漁師にそんなのいるようだな。

中川シズ シャツもモモヒキも買う所がなくてみんな作ったものです。

山崎徹 全部自家製ですか。

中川シズ はい。足袋だってみんな子供に作ってはかせて。

山崎徹 つぎの上につぎが重っているこういうようなことです。

中川シズ はい。そうする人ほど偉かったのです新しい物着たりしたら笑われたの。

中川政雄 この部落は昔からモンペだったよ。ここはモモヒキなんかはいていない。内地から来たそのままのかっこうでした。ここはうんさいという丈夫な木綿のズックのような織り方をした…。

中川シズ はんてんにむこう鉢巻で女人も働らいたし。

山崎徹 はんてんというのは綿入れですか。

中川シズ 綿入れも色々作ってあるんですよね。一反買って冬のと夏のを作ったんです。

山崎徹 こういう着る物とか日常生活、食べる物なんかね、フキとワラビ、あと川魚ということですが、正月やお盆の時には故郷の福井時代の食べ物というものを食べませんでしたか。

中川シズ やっぱりありましたね。それはどこでもあるんだと思いますけど。

中川政雄 トウフはみんな自分の家で作ったな。

山崎徹 団体によって福井団体、富山団体それぞれ違うんです。違うんですね岐阜団体…。例えば大津の方なんかに行くと魚の煮たき方、ちょうどお婆さん位の年の方の古い時代嫁に教えた落書き的な記録があるんですよね。「嫁、ほら覚えれ」って書いてね。「アキアジの頭、塩のやつを水出して、薄く切ってそれから筋子を入れて…」それが何だとかね。

中川シズ ひじなます。

山崎徹 それから「坊主の賄」と書いてある。坊主の賄にはこんな精進料理だとかね。そういう独特の物がやっぱりあるんですよ。

中川シズ ずいぶんやりました。それこそね。…

山崎徹 例えば、正月料理のメニューなんかちょっと言ってくれませんか。

中川シズ やはりお雑煮が主でしょうし、お雑煮におそば、自分で作ったものです。酢のものとか

中川政雄 そばは年越しです。

山崎徹 酢のものとは何ですか。

中川シズ ひじなますとか大根なますとか。ひじなますというのはアキアジの頭に筋子を入れるのがひじなます。普通のは大根と人参で作るんです

中川政雄 ひじなますなんていうのは北海道へ来て覚えたんで福井県ではそんなのはない。

中川シズ 漁場へ来たからね。熊谷さんなんかのやっぱり大根なますでしょうね。

中川政雄 お正月のごちそうといったら豆腐・油アゲでしたよ。そんなものでしょうね。フキだとかそういうものの煮しめですね。

中川シズ 鶏の卵。それしかなものね。

山崎徹 豆腐は自家製ですか。これは各自で作っていましたか。

中川シズ そうです。それからきな粉というものみんな自分で作りました。

山崎徹 正月・お祭・お盆・秋盆そういう時で、なあからぬ豆類は一般的家庭でも…。

中川政雄 作らないです。

中川シズ お米の御飯は間は一切入らない。

山崎徹 現在、中川さんでもちょっとした時に福井弁なんていうのは出ますか。

中川政雄 出ないです。

中川シズ 出せば出るわね。

中川政雄 福井県の人で相手がそういう言葉を使えばそれは出ますけどね。

山崎徹 この話は、明治41年の頃はみんな福井県の方ばかりだったですね。明治41年の頃どんな言葉で言っていたかってことになるんです。

中川政雄 福井県でも村によって大した言葉が違うんです。でもここは同じ所から来た人ばかりだから一定していた。

山崎徹 かなりひどい「越前弁」だったんじゃないかと思うんですが…。

中川政雄 ここはひどい。ここは…。

中川シズ 私ね、2才の弟をおぶって6月の末にそこで珍しかったからブドウの芽をとって遊ぼうと思ってね。そうしたら2才の子が、私が小さいものだから引きずる位大きいのです。それをおぶってそこでブドウの芽をとっていたらお母さんがむこう鉢巻きをしてモンペをはいて、ぞうりをはいて腰に縄をしっかりまいて帰りには馬の草を刈って帰るんです。カマを腰にさして、私を見た瞬間にこんなことを言いました。それはもう忘れません。「ああ、かわいいやなあ」こういうふうに節をつけるんですよね。「ああ、かわいいやなあお守りさんより子守りさんがかわいいのう。」つて、「かわいいやのう」って。さあそのおつかないことったらね。子供が大きくなって、子守りより子供が大きくなって。

山崎徹 今、北海道弁とかそういう。「おつかない」とか「ひやっこい」とか「めんこい」とかそういう言葉であれですか、「かわいいやのう」というのと同じように恐しかったなんていうのは…

中川政雄 いや、恐しいなんていう言葉ではない「おころしい」ですね。

山崎徹 寒いは寒い。暑いは暑いですね。悲しいは？

中川政雄 悲しいは日本語だな。標準語だな。悲しいって辛いって言わなかつたか。

山崎徹 不幸があった時にお悔みの言葉なんかどうなんですか。そういう時に案外方弁が残っているものなんですけどね。北海道の人達のお悔みの



トシミ 昔日の思い出を語る三氏（左から山崎徹、中川シズ、中川政雄の各氏）

言葉なんか決ってますね。「ご終生様でございました」って。そういう時に案外残っているものですけど何というのですか。

中川シズ 「気の毒なこっちゃのう」とか「気の毒なことをしましたのう」とかそういうふうに「のう」がよくきます。「ねえ」なんかも「辛かったやろうねえ」とか。

中川政雄 「悲しかっただろう」という言葉は「辛かったやろうのう」と言ったなあ。

山崎徹 宗教の浄土真宗の言葉で、あの人は共通な浄土真宗の信者だというのは…。

中川シズ 「ごしょうねがい」、「ごしょうねがいであった」って。信仰が深かいということからね。喜びが多いということかしら。

山崎徹 「おめでとう」は「おめでとう」ですね

中川シズ それはまたそれにもあるわね。「そりゃ、おめでたかったのう」とか「こっちゃのう」とかまあ、全然判りません。そういうことは本の上には書けないでしょう。

山崎徹 「カンカン」という言葉ありますか。まじめだということ、一生懸命だということ。

中川政雄 あります。そうです。それに没頭しているという。

山崎徹 これは私がこういうことで富山に行った時にですね、「越中のカンカン」という変な仇名があるんです。越中衆は本当のゴチゴチだという意味なんですね。そしてもうひとつ八戸間の素晴らしい所にね、数十万円はするだろうというような仏壇が大した家でもないのであるんです。

中川シズ それが手柄だったんです。

中川政雄 越前もそうですよ。私らここに来て大分若い者になってから、仏壇を石川県か富山県か

あっちの方へ注文して作る。それが浦幌の駅に着く。そうすると馬車や馬橇ではこわれるというので5人も7人も隣り近所の人を頼んでかつぎに行つた。

中川シズ いいところの娘がお嫁入りの時も馬車や馬橇に積まないんです。ちゃんとかつぎ人をよこすんです。定文の入った風呂敷をタンスとか長持にかけましてね、荷物を先に迎えに来るんですそれは内地式でないかしらね。そしてその方にちゃんとお繕を作つて御祝儀をあげて持つていってもらうんです。

山崎徹 駅通で結婚式を挙げたことがありますか。

中川シズ ありますかよそのはないですね。自分の兄弟だけで…。

山崎徹 越前式ですか。

中川シズ そうでしょうね。そしてそのお客様の時は三ヶ日お客様を呼ぶんです。今みたいに会館もなにもないですから。

山崎徹 会費制なんというものはもってのほかですね。

中川シズ 親戚とか部落のお父さん方、青年方とかそれにあけてね、三ヶ日位かかります。

山崎徹 隨分長い時間に亘ってお聞きしましたけれど明治何十年というその時代の生活をわずか3時間や4時間では判らんものですね。

中川シズ ちょっと前もって考えておけばよかったですけれど…。

山崎徹 いつも私もこうやってお会いして帰つて聞き忘れたということが沢山あるんですよ。お婆さんも家へ帰つてから言い忘れたということがあるんじゃないですか。

中川シズ 私ね、頭もない、腕も何もないんですけどね。兄さんはどうしてるかな。私も何かこうずっとおいたちから何か書いておくといいがなと思ったんですが書けないし頭もないからですけど今回まあ何かひとつでも言ってやろうと思ってきました。

(次号につづく)

**表紙写真解説『オコッペ遺跡』** 浦幌町字昆布刈石4番地3号に所在する擦文文化期の聚落跡である。太平洋に面した丘陵上に20余基の堅穴住居跡が存在し、今もって第三者の手が入いらざ極めて良好な保存状態をみせている。